

『ラディカル・エコロジー』

第6章「ソーシャル・エコロジー」プレレジュメ

第3週目発表班 (TEAM NUNO-ZOURI)

高橋・並木・中村・瀬川

第3週目発表班は、第6章「ソーシャル・エコロジー」を扱います。プレレジュメでは、要約を載せたので文献を理解するために役立ててください。

今回、ラディカル・エコロジーの「思想」の章のまとめになります。

そこで、ゼミに臨む前に皆さんに考えてきて欲しいことがあります。

それぞれが扱った章を読みなおし、「ディープ・エコロジー」「スピリチュアル・エコロジー」の立場になってください。

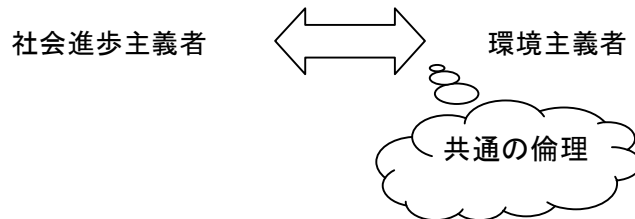
議論では、3つの思想の立場から、私たちの自然に対する意識の変え方について考えていく予定です。各自の立場・意見はあると思いますが、汗水流しながら読解した立場をとり、議論しましょう。

要約

■社会進歩主義と環境主義者

『ラペーとキャリコットが提唱する、マルクスと自然保存主義者ジョン・ミューアの両者からの、エコロジーの見解』

⇒一見すると対立して見える社会進歩主義と環境主義者だが、実は共通の倫理が存在する。



【共通の倫理】

- ①産業の発展は、全ての人に社会主義をもたらしたわけでもなければ、健康な環境をもたらしたわけでもない。
- ②種は一定地域の他の生物全体およびそれを支える物理的環境に対する関係性の中で生存する。人間は相互依存的な社会的コミュニティの一員として生存する。

人間と野生生物の両者が存在することの出来る世界は、
生物学的方法と社会学的プログラムの両方により可能。

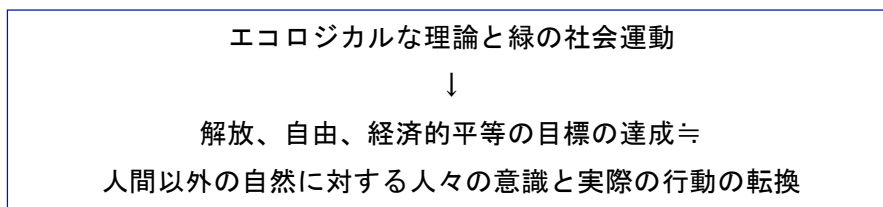
■エコロジーとマルクス、エンゲルス

多くの人が生産とエコロジーの矛盾を解決する道を探している。ソーシャルエコロジスト達は、主要な目標が社会主義であるので、根本的な倫理は人間中心主義である。

ソーシャルエコロジスト… “根本的な倫理” = 人間中心主義

しかし！！生態学と弁証法的科学により修正される

エコロジカルなマルクス主義者≡民主社会主義者、ソーシャルエコロジストの主張



■マルクスとエンゲルスの理論

①科学と技術を通じた自然支配が人間を自然の専制から救う

⇒しかし、それだけでは不十分

②人間と人間以外の自然との「エコロジカルな結びつき」の重要性

・マルクス時代に支配的であった二つの見方

①機械論的唯物論…全ての変化は外から引き起こされる、という見方

②ヘーゲルの見解…世界は根本において精神ないし観念である、という見方

これら二つの見方から欠けているのは、“社会的諸関係”である

■マルクスの社会変革理論

上記の二つの学派のから理論の一部を借用⇒・物質的世界は実在する。

・『**変化の過程は弁証法的である**』

『物質的世界は耐えざる変化の過程のうちにある。というのは、全ての出来事は、肯定的な力、と否定的な力をともに有している。また全てのものは何か（任意の）他の事物ではない。…略ある事物とそれの反対物とのこの緊張ないし矛盾が、その両者を滅ぼし新しいものを生み出す。…略』(p. 182, l. 14)

『同様にして、人間の社会転換も矛盾する両者の間の緊張から起こる』

⇒世界を根本的に過程と変化として見るということは社会的な含意にとどまらず、自然に関する含意もある。

そこで…『人間の身体を作り上げている物質と自然との間の本質的な連関』を認める。

そもそも…

①人々は肉体を持ち感覚的であるとともに、他の動物や植物と同様に、彼ら自身の外側の事物によって制限され条件付けられてもいる、活動的自然的存在である。つまり、自然の一部である。

②彼らの外のこれら対象と異なっていて、それらに依存している。

しかし、人間は他の動物達とは異なっていて、社会的に編成された道具を用いて自然を作り変える。

- 「初期の社会（牧畜社会・飼育-栽培社会）は資本主義社会とは異なった自然への関係を有していた」 (p. 185, l. 3)

初期の社会・・・自然を生活の目的（労働、労働のための道具）として利用する

資本主義社会・・・自然を私有財産として、利潤のために売買する

エンゲルス

「大地を行商の対象にすることは、自己を行商の対象にする最後の一步であった」

⇒ 疎外の究極（人間が搾取される）

- 「自然を作り変えるこれらの様式（＝資本主義、科学の進歩）は、予想されなかった副次的結果をもたらす」 (p. 186, l. 2)

例) ・ギリシアの島々に外から羊や豚を持ち込んで放牧した

⇒ 森林の再生を妨害、その土地固有の植物を絶滅させた

・新世界からヨーロッパにジャガイモを持ち込んだ

⇒ ルイレキ（リンパ節結核）を広がらせた

……etc

エンゲルス

「我々が自然を支配するという事の本質は、我々が自然法則を知り、それを正確に適用できるという、他の全ての生き物たちに勝る有利な点を持っているという事実に存する」

精神と物質、人間と自然、魂と肉体の間には本来的な矛盾は存在しない

⇒ これら二元論を解消するのがラディカル・エコロジーとエコフェミニストの目標の一つ

- 「資本家による農業はコミュニン的農業と比べると、はるかに大規模に土壌を浪費し搾取する」 (p. 187, l. 15)

資本主義的農業	コミュニン的農業
<p>利潤追求のために生産する農業</p> <p>市場の競争的性格が、土地の肥沃度を維持するために必要な労働と費用を導入させ、土地と労働者を搾取することで成長する。 (＝過剰生産・過少生産を引き起こすおそれがある)</p>	<p>諸世代の生存と再生産のための農業</p> <p>コミュニンの永久財産として、人間の生命活動のための不可欠な条件として土壌を意識し、必要なものを必要な分だけ耕作する。(＝合理的な農業、自給自足)</p>

- ・資本主義的生産様式と産業化がもたらした「生態学的な」問題（マルクスの分析）
 - ① 利潤のための生産に適合する農業における、土地の生命力の劣化
 - ⇒「生命の自然法則によって命ぜられる社会的な交換の結び付きを」壊す
 - ② 産業と人間の消費から生み出される有用な廃棄物が環境に蓄積された
 - ⇒全ての廃棄物を最大限に使用する「廃棄物を防止する経済」が求められた
- 「マルクスの社会変革の理論は、生産の物質的な力〔物質的な生産力〕と社会的な生産関係との衝突に基づいている」（p. 189, l. 11）

【マルクスの社会変革の理論】

物質的な生産力	社会的な生産関係
<ul style="list-style-type: none"> ・労働（働く人間） ・生産手段（工場などの土地） ・技術（機械や道具） 	<ul style="list-style-type: none"> ・労働する階級（労働者、奴隷、農奴） ・生産物を所有する階級（資本家、奴隷所有者）
<p>〔労働と技術の関係〕</p> <p>技術が進歩すると必然的に人間の労働力に勝り、人間の労働力が縮小される。</p>	<p>〔労働者と資本家の関係〕</p> <p>生産した物が、生産した本人(労働者)が所有するのではなく、資本家が所有する。（生産物の横取り＝搾取）</p>
<p>ある社会体制のもとで生産力が発展していても、生産関係は変化しにくくそこに生じる矛盾が革命を引き起こして新たな生産関係を作る（社会の弁証法的発展）</p>	

■アナーキスト・ソーシャル・エコロジー（自由のエコロジー）

マレイ・ブックチン（アナーキスト哲学者）

「ソーシャル・エコロジーは、自然、過程、多様性、自発性、自由そして全体性のバランスを根本とする」（p. 191, l. 4）

⇒無文字社会のような、生態系と社会における位階制のない有機的な社会が理想

「ソーシャル・エコロジーの主要な目標は、これらの二元論的対立を廃棄することである」（p. 192, l. 4）

↓

- ・物質的・自然的なものに対する知的なものの支配
- ・娯楽に対する仕事の支配
- ・感覚的肉体に対する精神的抑制の支配

「自由のエコロジー」…エコロジカルな全体は部分の総和を越えたものだという概念
⇒有機的で、過程を重視する弁証法、多様性における統一

■「ブックチンは、エコロジーと環境主義とを区別する」（p. 192, l. 15）

環境主義・・・自然を人間のための資源として、人間を経済のための資源として見る、近代世界の**機械論的で道具的な見方**。(＝無機的)

⇒現状を疑問視せず、自然や他の人間に対する人間の支配を行いやすくする

エコロジー・・・生物と非生物の間の働きかけ合いを前提とし、現状の人間と自然の関係に取って代わるものになる**潜在的可能性を持つ**。(＝有機的)

ソーシャル・エコロジー・・・人間と人間の相互依存を人間以外の自然と結合する。

⇒社会に拡張される**エコシステム**

⇒コミュニティの進化・発展に存在する豊かな多様性と様々な違いを明らかにする

⇒自然を**支配ではなく管理**する

■エコロジカルな見方

・自然の位階制に異論

「人間コミュニティと自然のエコシステムは進化・発展しつつ相互に働きかけ合う。」

→未来にとって意味すること

①世界の滅亡

②人類と自然的世界の関係性を転換

・究極的な生態学的崩壊（＝世界の滅亡）を避けるためには

→**生態地域の諸条件を認める**

①生態地域の特定の条件に適した技術、農業のやり方、コミュニティの大きさ

②エコロジカルな感受性に適合する新しい社会制度の必要性

③多様性の促進

■社会における支配をなくすために

人間の格差をなくすことの必要性を説く

①生活の質の向上

②基本的欲求の充足手段の再分配

③エコロジカルな基盤に立った開発・発展政策

■ディープ・エコロジー（DE）とソーシャル・エコロジー（SE）との違い

①問題の根

SE「社会（とくに経済）とエコロジーとの弁証的対立」

→「社会の発展」と「自然の保護」の結びつきを意識させる

DE「エコロジカルな世界観と機械論的世界観との衝突」

→「自然を中心にする見方」と「自然は科学にとって代わられる見方」の衝突

②行動の方法

SE「エコロジカルな開発・発展と社会正義に焦点を当てねばならない」

→人間に利益が得られるよう、自然を保護する

DE「世界観を転換し、大地との宗教的・精神的結びつきを取り戻す」

→人間と自然の関係を転換する

■ソーシャリスト・エコロジー

・「資本主義後の社会への移行のエコノミクス分析」を提出

→資本主義は「エコロジカルな社会主義」へ転換

・以下3つを統合

①生態学

②自然の社会的構成

③自然の自律の諸概念

・ジェイムズ・オコンナーの理論

資本主義の2つの矛盾

①伝統的マルクス主義による矛盾

「生産諸力」と「生産諸関係」との矛盾

→【マルクスの社会変革の理論】で説明済み

②エコロジカルなマルクス主義による矛盾

「生産」と「生産が行われる環境の諸条件」との矛盾

→「生産が行われる環境の諸条件」とは

<3つの条件>

i) 外的・物理的条件

→土、水、空気などが良質であること

ii) 労働者の人的条件

→労働者が健康であること

iii) 生産の社会的条件

→労働者と管理者の間のコミュニケーションの手段があること

・ 2つの矛盾からによる経済危機

<第一の矛盾>

→商品の過剰生産による

<第二の矛盾>

→商品の過少生産による

生態系に対する破壊的方法が要因

「資本主義は自然を・・・資本化された自然・・・として再創造するのである」

・ 社会変革の主体

<第一の矛盾>

→伝統的な労働者階級と社会主義運動

<第二の矛盾>

→新しいエコロジカルな社会運動

「資本主義がより一貫した社会的な方法で、
潜在的には社会主義的方法で答えるよう強いる」

※留意点

国家主導型の社会主義を批判

<理由>

エコロジカルな危機を引き起こす

エコロジカルに破壊的な政策を助長

→利潤動機が原因ではなく、完全雇用のための努力が原因

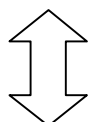
■ 「生存の生態学(=科学)」の例

害虫防除法<総合的害虫管理>(Integrated Pest Management)

→多量の輸出用綿花を生産するためにニカラグアで行われていた、際限のない農薬使用によってかわる技術。

新しい政府のもと、IPM プログラムの実行が可能な農場の再編成がなされた結果、

新しい生産力(IPM)と新しい生産関係



→ 農薬支出の節約、高い生産高

よりよい生産条件(土壌の健康、労働者の健康など)

- ・ IPM により、生産における独立の度合い(化学薬品会社からの独立、農業労働者のための職)は強まったが、その他の事情による世界市場と政治への依存が、ニカラグアの経済的安定を妨げている。

■ 弁証法的生物学

弁証法的科学が基づく 4 つの仮定

- i 全体のなかの部分の関係の重要性
- ii 性質は全体から意味を受け取る
- iii 部分と全体が相互に貫通的である
- iv 安定は瞬間的なバランスにすぎず、全てにおいて変化が基本的である

『弁証法的生物学者』著者、レヴィンズとレウオンティンによれば

<機械論的科学>

デカルト主義的、還元主義的、実証主義的

- ・ 観察可能なさまざまな現象を、その根底にある微小な部分(原子と分子のような)の関係によって説明する。
- ・ 内的原因と外的原因とを切り離す。
→その結果、一方を不変に保ち、他方を変化させる。
例) 生物が環境の変化に適応する。

<弁証法的科学>

①変化②歴史性③社会による構成 を強調する

- ・ ①…弁証法的科学は変化を基本的なものとみる。それはなぜか？
→対立物の間の矛盾は、存在そのものの基本的性質である。「対立しあう諸力が事物に作用するが故に、事物は変化する。そして事物は対立しあう諸力の一時的なバランスによって存在させられているそのあり方である」。
例) 捕食者—被食者の関係性
- ・ ③…「科学は社会的に構成される」とレヴィンズとレウオンティンは語る。
それはなぜか？
→「我々の精神は社会的に構成されるからであり、そして個人の思考は社会的な需要と流通の過程を通じてはじめて知識となるからである。」
- ・ 自然法則の対象が主体になりうる。そして、見かけ上は不変の法則それ自体を変化させることがある。
例) 環境の構造と、生物の遺伝的構造が合わさってもたらず結果に注目する。

■異なる立場からの批判

①ディープ・エコロジストからの批判

- ・ 流行遅れになったマルクス主義の理論に頼っている
- ・ トランスパーソナルエコロジカルな自己の分析を提出していない
※トランスパーソナル・エコ…世界を、他の生物・生態系を含む「拡張された自己」と見なす考え
- ・ 弁証法に基盤を置くオルタナティブな科学を欠いている

②スピリチュアル・エコロジストからの批判

- ・ 経済的、物質的な欲求の充足以上のことは何も提出していない
- ・ 宗教的、精神的欲求を侮辱している

③エコフェミニストからの批判

- ・ 社会的に作り出された性差別と環境の問題を克服するための提案を欠いている
さらに、
- ・ 環境倫理に対して注意していない
- ・ 人間中心的な倫理が同時にエコロジカルな諸原理を内部に取り込み変わることができるのかを示していない
…などと論難されている。

★しかし！変革のために自身の提案を再考し、評価し直すよう強いるためのラディカル・エコロジストたちによる論争は重要なのである。

■結論

ソーシャル・エコロジーの特徴

- i **人間の経済的生産のシステムと環境の密接な関係を強調**
 - ・資本主義や、国家主導型の社会主義(人による支配が行われる社会)は外部性を生みだし、自然を破壊する。
→エコロジカルな観点から持続可能であるような経済再編をするべき！
- ii **持続可能性と両立しうるレベルの世界人口の安定化を期待**
 - ・人口増加率の減速を望むが、人権の諸権利を無視するプログラム(ディープ・エコロジストの一部にみられるような)を非難する。
→代わりに、経済的プログラムを整え、先進国と途上国の双方において生活の質を平等化する道を考える。
- iii **変化の認識を重視する科学(弁証法的科学)を擁護**
 - ・社会的価値を重視し、自然的世界を理解するための基本的前提として上記の科学を擁護している。
→世界観における大きな転換とプロセスを重視する科学の必要性を主張する。

●ディープ・エコロジーとは、上記の下線部の部分は似ているが、、

人間の条件・転換の経済的基盤の重視・人間中心的な倫理の重視
という点で、決定的に異なっているのである。